

ケアポート板橋

症 例 概 要 利用者氏名：A・T様（80代 女性 要介護5） 5階ご利用者

利用期間：平成29年6月 ～ 平成30年1月

経過：20代の時に韓国から来日。認知症の進行により訴えが韓国語となり、真の訴えを汲み取ることが難しい状況でしたが、「講座制度」を活用し皆で韓国語を学び、A・T様の訴えに寄り添いました。肺炎となり、IVHでの延命が続きましたが、二宮Dr、看護、介護の連携と、最期ををケアポートで迎えたいという強いご家族の希望を叶え、全職員でお看取りさせて頂き、かつご家族より心からの感謝のお言葉を頂戴する事ができた症例。

内 容

入居時より嚥下状態が悪く、十分な食事と水分を取ることができない状況でした。往診歯科のVE検査では誤嚥が確認され、時間を掛けてのミキサー食提供と共に、家族への説明を重ねて参りました。また、認知症の進行からか韓国語で訴えることが多くなり、本人のご希望を汲み取ることが難しくなっていました。

そこで在日韓国人スタッフに韓国語講座を依頼し皆で韓国語を学びました。本人の訴えを汲み取る事はできるようになりましたが、依然体調は改善せず平成29年8月にICを実施。延命するか自然な形での対応を行うのか、家族は迷われておりました。再度9月にも実施するも、経口摂取を強く望まれ結論を出すことができないでおられました。その間も体重が減少。現場では補食を様々考え、細心の注意を計り少量ずつ時間を問わず提供を行っていきました。

10月、肺炎の診断で入院されIVH対応となりました。1ヵ月が経過する際、息子様と面談の場を設け、年明けに親族が集まりその時に点滴を抜き、最期はケアポート板橋で迎えたいという決断をされ、看取り前提での受入れを家族、二宮Dr、看護、介護で覚悟を致しました。

1月上旬退院。長期間実現できなかった入浴も、看護見守りの基実施。「気持ちよかった」と笑顔で話されたのは忘れられません。平成30年1月下旬、家族に見守れる中ご逝去され、民族衣装であるチマチヨゴリでの出棺。「苦しまずに逝きました。最後は家族で体も拭けました。本当に感謝しかないです。言葉になりません。」と涙ながらに感謝のお言葉を掛けて下さいました。

看取り前提での受入れは、職員の連携だけでなくチームで覚悟をすることにあると思います。また受入れることができたのも、質の高いチームケアにてその人らしさを支援する風土が根ざっているからであると考えます。今後ご利用者1人1人に寄り添い、ご家族にも安心を超えた感動を提供できる様職員一同邁進出来たらと思います。この症例はキラキラ介護賞に値すると思ひ推薦させて頂きます。